第１５回ふくしまボランティアフェスティバル シンポジウム
「東日本大震災におけるボランティア活動とこれからの住民生活へ向けたボランティアの関わり」

●コーディネーター　長谷部 治 氏
　神戸市社会福祉協議会
　災害ボランティア活動支援プロジェクト会議
　ＮＰＯ法人日本ボランティアコーディネーター協会理事

●シンポジスト
〇今野 大 氏（相馬市社会福祉協議会 次長兼生活復興ボランティアセンター長）
〇渡部 正勝 氏（大熊町社会福祉協議会 事務局長）
〇甘南備 かほる 氏（ＮＰＯ法人ザ・ピープル 事務局長）
〇加藤 光一 氏（福島連合 副事務局長）

…☆

【長谷部】
　それではみなさんこんにちは。先程は、なかなか控えめな拍手をありがとうございます。（会場爆笑＆拍手）ありがとうございます。関西人なんでこれで少し乗る気がします。神戸から参りました長谷部と申します。調子に乗ればのるほど軽やかに関西弁が出てまいりますが、実は岐阜県の山の奥の方の出身でして、大学時代を鹿児島で過ごして、大学３年生の時に、阪神淡路大震災のボランティアで神戸市長田区に参りまして、ボランティア活動や災害ボランティアについて学びました。そして神戸の社会福祉協議会、神戸市長田区の社会福祉協議会に就職しまして、１７年間社協職員としてやっておりました。で、そうこうしているうちに二男が生まれて、嫁さんが育児休暇を産後取ったんですが、そのあと、僕が「よし！」ということで、育児休暇を半年僕がやりますよということで、３月１日から仕事を休職しました。今でいう、ご存知でしょうか？「イクメン」ていうの。残念ながら「イケメン」ではないので「イクメン」のほうなんですが。３月１日から育休が始まって、二男と一緒に保育生活というのを始めたわけですよ。なんで泣いてるのかも分からん中で、四苦八苦しているときに３月１１日、みなさんもよくご存じの東日本大震災という状況になって、実は半年間育児休暇取るはずだったのをたった１か月で止めて、職場復帰しまして。即日で現場派遣、災害ボランティア活動支援プロジェクト会議に出向となりました。で、福島県担当ということで、生まれて初めての福島に参りまして半年間生活をさせていただきました。
　まあ大変だったのは嫁さんのほうで、職場復帰した途端に旦那いなくなって、長男、二男と２人見なくてはいけない状況でして、あわてて保育所に駆け込むなんてことになったんですが。
　まあ、そういう訳で、ぼつぼつと私のプロフィールをお話しているうちに、昼食が長引いた方もお戻りになられたような雰囲気になりましたので、本題に入っていきたいと思いますが。
　正直神戸におりますと、昨日飯坂温泉に泊まって、こちらのニュースをみたり地元の方とお話をしたりしていますと、だいぶ違いますね。まずニュースのボリュームが違う。地震の問題、原発の問題についてむこうでも報道はしていますが、ここまで詳細な報道はなされていないし、ニュースの中でこれだ

けきっちり時間が使われることが無くなってきています。それだけに、短い時間のニュースや報道の中に、正しい情報が伝えられるためには、ここ地元の努力も必要だと思うんですね。それはメディアの努力だけではなくて、一人ひとりの住民さん自身の生活をきちんと見せていくこととか、地元できちんと助け合いが行われてるんだということも含めた、地元からの発信がすごく大切だと思っているんです。

で、今日のテーマとして頂いているのが「これからの住民生活に向けたボランティアの関わり」ということで、これからを見据えた活動です。皆さん自身がどんなボランティア活動を起こして地域に関わっていくのかということが、この２時間の中で出来たらなと考えております。

それをやっていくためにも、様々な現場で発災当初から…福島って言っても広いですよね。だってＤＡＳＨ村入れて６０市町村でしょ？１つ１つそれぞれの市町村でも違いがすごくあるんですよね。それも知ったうえでスタートを切らないといけないということを、これは誰かがやってくれることではなくて、一人一人が皆さん自身の私事としていかないと、きちんと質が高まっていくことがない、と僕は思っているので、今日はこの方々にお話しを伺っていきたいと思っております。発災当初どんな状態だったとか、この間どんな活動をしてきたとか、いまどんなことに困っているんだとか、こうしたことを、きっちりとひも解いていただいて、皆さんと一緒に活動と結んでいくことをこの２時間で進めていきたいとおもいます。

それでは４人のシンポジストのみなさんに最初１０分ずつ、それぞれの自己紹介をまずしていただくという時間にしたいと思います。ではまず今野さんから。大きな拍手。

【今野】

相馬市社会福祉協議会の今野と申します。３月１１日からどんな活動をしてきたのか、パワーポイントで見ていただこうと思います。みなさんご覧ください。相馬市の災害ボランティアセンターの活動からということでお話していきます。これ、相馬市の地図なんですが、ピンク色の部分、津波被害が大きかったところです。最大で津波が１０ｍありまして、沿岸部から６キロくらい内陸まで津波が押し寄せてきました。これが、津波直後の映像ですが、一番上の写真がですね、ちょうど田んぼだったところに沿岸部の民家が全壊して押し流されてきたところ、ガソリンスタンドもこのような状態。（津波が）屋根の上を超えていってしまった。下の向かって左の写真、沿岸部から３キロくらい離れたところで、がれきが家の中まで入ってしまう。右側の写真がですね、松川浦大橋という橋がありまして、その下にあった割烹旅館なんですが、軽トラックが入り込んでしまったと。

被災の状況ですが、４５９人が亡くなり、１０４９戸が全壊という状態です。で、一番避難者が多かったのが３月１４日、４，５４５人になります。

社協が最初に（災害支援活動を）始めたのが、１１日の４時に避難所を開けまして、最大ここに１，０００人が入りました。避難所の状態はこんな感じで、通常だとパーティションで仕切って、ある程度プライバシーを守るんですが、本来１，０００人入らないところに１，０００人入ったもんですから、仕切ることもできずに雑魚寝状態、ということになります。

災害ボランティアセンターですが、通常７２時間以内に立ち上げと申しますが、原発の問題もありそんな訳には行かず、１０日後、３月２１日に開設いたしました。「総務」「受付」「マッチング」「送り出し」「ニーズ」という班を作りまして、社協だけでは運営できないもんですから、行政、商工会議所、連合さん、高校の先生などからご協力いただいて運営しました。

ボランティアセンターの様子なんですが、朝のミーティングが終わりますと、９時から受付を開始する。受付が終わりますと、今度はマッチングと言いまして、ボランティアさんの活動先を決めていく。うちのほうでは張り出し方式でやらせてもらいました。で、マッチングが終わりますと腕章に名前を書いて送り出しと。ここではオリエンテーションということでケガの注意ですとか、いたしまして活動先に行って頂く。１日多い時で３００人位のボランティアさんが来ております。被災者からのニーズなんですが、電話で来たり、直接来ていただいて受けたりするんですが、必ずボランティアさんが行っていただいて大丈夫なのか、片付けしているうちに家が崩れてしまう、つぶれてしまうなんてことがないか、調査をしてから入ってもらうようにしておりました。で、相馬の場合、９時から３時までの活動にいたしました。放射能のこともありましたので、雨の日は活動を中止したりと工夫しました。活動が終わると必ずセンターに戻ってもらって、活動の報告をいただくと。全員戻ったのかということと、その作業がもう終わったのか、明日も続くのかということですね。あと、けがした人がいなかったのか、という部分で活動報告を受けています。

ボランティア活動の様子なんですが、発災当初については、物資の仕分け・配布、応急給食の炊出し、その他に、津波被害に遭わなかった所で高齢者宅の家具の片付けなどがありまして、３月２６日、行方不明者の捜索がある程度終わったところから、がれき撤去・泥かき作業が始まっています。ご存じのとおり松川浦は海苔の産地でありますので、海苔網でがれき撤去のところで非常に苦労しました。海苔網が絡まって民家に入っていましたので。そういうのが大変、そのあと泥かきという作業があります。それから写真洗浄なんですが、１，０００世帯が全壊しましたので、うちの中にあったアルバムがどんどん流出していたと。それで身元不明の捜索をしながら消防団の方とか自衛隊の方がアルバムを見つけると集めてきたと。アルバムから１枚１枚外しまして、洗って、干して、ポケットアルバムに入れて陳列するという作業、これ１０万枚ほど洗わせていただきました。でも洗っただけですので１年もすると色が褪せちゃう。そこで８月にソフトバンクさんの協力でデータにして配る作業もしております。

活動の報告なんですが、９月１５日までに１，５５１件、１１，３６９人の方が作業しております。登録者数では断然県外が多かった状況です。

相馬市の仮設住宅ですが、１５か所に１，５００戸ほど出来ております。そのほかに相馬市民の民間借り上げ住宅が５９５戸あります。相馬の場合、仮設住宅が出来たのが早いものですから、５月２６日から応急仮設住宅の訪問が既に始まっております。ニーズ把握のための全戸訪問ということで 5 月中旬に臨時職員を 2 人雇用しまして訪問しております。ニーズ把握のため曹洞宗青年会の皆さんにご協力いただいて、お茶会も６月から実施しております。

生活復興ボランティアセンターの基本理念なんですが、まずは「命をつなごう」と。今までの災害を見るとどうしても自殺者が出るものですから「命をつなごう」です。それから、放射能の問題もありまして、震災後に実際１，０００人以上人口が減っております。そんなこともありましてこの「相馬（ち）で生きる」、相馬で生きようと。それから、ボランティアセンターの仕事は、色々なところにつなぐ仕事だと思っていますから「組織をつなぐ」です。

８月１日に災害ボランティアセンターから生活復興ボランティアセンターに移行しまして、１つ目は「応急仮設住宅のコミュニティづくり」ということで、見守りと、お茶会を開催してニーズを収集したり、被災者に情報提供したりということをやらせていただいております。これが見守りの様子、２人一組で見守りをしております。それからなかなかコミュニティのつながりが作りにくくなっているという

ことで「応急仮設住宅のまちづくり」を二つ目に挙げまして、イベントのコーディネートですとか、サロンの活動とか、それぞれの仮設に組長・戸長もできましたので情報交換などを行っております。それからサロンですが、最初はお茶飲みだけだったんですが、みなさん運動したいとか、カラオケしたいとなってきましたんで、最近では軽体操したり、カラオケしたりしております。そのほかに「被災在宅生活者の支援」ということで、仮設には行かなくていいけれども、被災しているという方について、要援護者については民生委員さん、区長さんにお願いし、声掛けなどをしていただく仕組みづくりを行っております。それから津波被害があった地域でお隣り同志など、つながりが難しいときくので、公民館でのサロン活動をおこなったり、支援者を募ったりしております。８月１日からは生活支援相談員１３名体制で活動しております。相馬では動きが早かったこともあり、だいぶ生活支援相談員も慣れてきてますので、毎日訪問しながら御用聞きのような活動をさせていただいております。以上です。

【長谷部】
　ありがとうございました。それでは、何点かお聞きしたいのですが、仮設住宅でね、支援活動というのは他の地区でも課題になってきてると思うのですが、これがコミュニティを作るうえで効果的だったなあと思うことに少し触れていただけたらと思うのですが。

【今野】
　はい。まずお茶会を最初のうちから始めたというのは、仮設が長屋方式で、隣の音がどんどん聞こえるところに住んでいるもんですから、親しくても喧嘩になるんですよ。だからお茶会で気心知り合った中というか、会話する中で喧嘩が無くなってくる、そんなことがありました。ストレス溜りますのでね。

【長谷部】
　神戸の時だと男性がなかなか引っ張り出すの難しかったのですけど相馬ではどうですか？

【今野】
　男性は難しいですね…。

【長谷部】
　そうなんですねぇ。今、男はアカンと言いそうになってしまいましたが（笑）、男性をそういう場に引っ張り出すところまではなかなか手段が難しいですよね。とくにそれが具体的な問題になった事例までには至っていない？

【今野】
　そうですね。いってないですね。男性を引っ張り出すのにはカラオケが良かったですね。集会所にテレビがあるもんですから、マイクにカードを入れてカラオケしてもらう機材を持っていきましたら「俺のほうがカラオケ得意だ」なんて言って、参加してくれる男性が多く出ました。

【長谷部】

ありがとうございました。それでは今野さんに拍手で次の方に伺っていきましょう。次は渡辺さんお願いいたします。

【渡辺】

改めまして皆さんこんにちは。大熊町社会福祉協議会で事務局を預かっております渡辺と申します。午前中はだいぶ訛ったダニエル・カールさんの話で、引き続き訛った私のはなしで大変申し訳ないのですが少しご説明させていただきたいと思います。

私どもは震災発生の１１日の津波に遭った被災家庭が３２戸ございまして、そのうち１５人の方が津波に流されております。そのうちまだお子さんが１人だけまだ見つかっていないのが現状です。その後、今月の初めまでで、その方々も含め１７７名の方が亡くなっております。現在１１，５００人の町民が全国４２の都道府県に散らばっておりまして、福島県内に一番多くいらっしゃいます。県内では５９市町村のうち４８市町村に居住をしております。一番多いのが会津若松市で約４，０００、それからいわき市の約２，６００ということで、それぞれにお世話になっているところです。そんな中で、事務所のスタートもよそから見れば少しは早かったのかと思います。学校なども含めて動きましたので、当初会津には二次避難所も含めまして５，６００人位入っておりました。現在は先ほどお話したような状態になってまして、２地域での事業運営というような事になりました。まず会津若松では生活支援相談員を会津若松さんにもご協力いただいて、会津若松（市社協）で３名、私どもで５名の合わせて８名で１２か所約８９０戸の生活支援相談を行っているところでございます。そして、いま２，７００になろうとしているいわきですが、今建設仮設が４か所４００戸、これから年度内に１５０から２００の仮設がさらにできるということで、入居者が約９００人、それから民間借り上げが１，７００名ほど入っている状況になっておりまして、いわきは昨年の 11 月から生活支援相談員６名を入れて仮設住宅生活者の支援に当たっているところであります。

そのなかでボランティアさんにつきましては、６月１日から災害ボランティアセンターを立ち上げなくてはいけないな、と準備した部分もあったんですが、もう災害復旧ではない、生活支援だということで、また、町民をなんとかつなげたいなという思いもありまして、ご支援をいただいた方も含めて協議した結果、何がいいかな、それでは“つながっぺ”、ということで、つながっぺセンターというものを作らせていただき、６月１６日からボランティアさんを募らせていただいて、活動者数は掴みきってないのですが、登録をいただいて、支援物資の支給、これも地元会津若松さんにはご苦労おかけした部分だと思っていますが、８月に準備をして引き継いで、１２月までボランティアさんにご苦労頂きました。

１つには、こういうことをここで言っていいのかというところもありますが、最近どうしても同じように被災した社協職員に会うと、物を欲しがる方が増えているという部分、認知症の方が増えているという話がでるのが現状です。

自分達の仕事というのが職員５人、臨時職員が生活支援相談員入れて１３名でやっております。そうした中で、動いて窮屈な部分がありまして、手当てできない部分があります。今月１０日の新聞をご覧になった方いらっしゃるかもしれませんが、建設仮設住宅はそれなりに支援があって、自分たちで集える場所を作ることが可能なんですね。ところが拠点となっているところの民間借り上げ住宅、それぞれの市町村、県外にいらっしゃる方の支援…４月から少しでもしていきたいなということで、まずは自分たちで集まっていただいているところに顔を出して必要な情報があれば伝えていくと、できるだけ自立

して活動いただく中でつながりが出来ればと模索しております。その中で何が必要かといいますと、やはり地域にいる方々に、隣の人１人連れてきてもらうだけでもボランティアだと思うんですね。そういった活動をさらにお願いできればなと考えているところです。もっともっと話していますと、後の人にも迷惑になりますので、あとは所々で振っていただければと思っております。

【長谷部】
　つながっぺセンター、初めて私が渡辺さんのところに伺ったときに、胸のバッヂをいただいたんですが、少しご紹介いただいてよろしいですか？

【渡辺】
　はい。これはですね、５月３０日と記憶しているんですが、（関東ブロックの幹事である）東京都社協さんが支援できますよということで、この白地のものと、もう一つ、ブルーに黄色のクマがプリントされたもの、これは会津にお世話になっているということで白虎隊にちなんだものなんですが、こういったもので少しでも心和ませながらつながっていけたらな、という思いで作っていったものです。Ｔシャツもあるんですが、背中を向けて並ぶとクマさんがみんなつながっているというもので、今日持ってこなかったのが残念なんですが…そんなわけで作ってきました。

【長谷部】
　大熊の「くま」と白虎隊をモチーフに作られているという、初めてこのお話を伺ったとき「この土地（会津）でしばらくやって行くんだ」という、覚悟のようなものを感じたんですが、その頃の「会津で」と、「いわきも」という状況など、だいぶ変化しているように思うのですが、避難８町と飯舘村を合わせ、９か所が町村ごと他の自治体に避難しているという、これ、過去に例がないんですね。敢えて言えば、三宅島の火山噴火の時に三宅島から全村避難された例があって、今回避難された町村の支援活動の中で、かなり参考書として三宅島の活動は使われているんですが、それでも多くの苦労の中でお暮しになっていると思うのですが、会津で暮らす、いわきで暮らす、行政機関ごと移動して…という状況の中で。この状況でここが一番しんどいねん。ここが大変なんや、というとこってありますか。

【渡辺】
　そうですね、やはり人的配置の点ですかね。まあ、人がいればお金がついて回るのですが、社会福祉協議会が事業活動を行う部分で、他の社協ですと包括支援センターを持ったりとか、通所介護持ったりということがあるんですが、うちの場合それがありませんでしたから、逆に避難の時は楽だったのかなということもあるんです。が、ここに来ると、どんな事業をやるにしても支援がないと成り立たない。
　特に浜で育ってきたという部分もありまして、雪、その部分では１１月頃にいわきに仮設が建ち始めると向こうに行きたいと。（以前の）生活の匂い、潮のにおいを求めてというのは、多少なりとも予測できたのですが、特別法が１１月に出来てですね、学校教育法なり、介護保険法に基づいて避難先でできるという風になりましたけどね、やはり数が増えてくると顔が見えてないと不安なのかなというのもありますし。できれば（事務所を）１か所でまとめたいという思いもありますが、避難者のことを考えると顔の見えるところにいたい。初めのころ、東京都から三宅島の資料もいただいて読みましたけども、

三宅島は最終的に４年以上かかっておりましたよね。自分のところに戻るのに。今回の状況を考えると、まあ、自分の立場上これを言っていいのかわかりませんが、４年以上かかるのかな、と考えると、人とお金の問題が膨らむのかなと考えてしまいます。

【長谷部】

実はね、私、阪神・淡路の被災地である神戸の長田区でワーカーをしてきまして、１６年間、仮設住宅や復興住宅で暮らしてはる方の見守りを担当してきたんですね。つまりね、４年で帰った三宅島っていうのもありますが、阪神・淡路はまだ住民の見守り活動やってるわけなんですよ。１６年前で。仮設住宅の災害救助法でいくところの、仮設住宅入居期間の２年３か月、で、今回は特別措置で県等の判断で１年ごとの延長ができるという風になっていますので、１年ごと何回できるかは規定がないんですけども、逆に言えば今の時点で決まってないんですけども、３年、４年と今の仮設住宅で暮らしていく可能性が強くなっているんですね。それは法律のルールとしてですが、事例としても阪神・淡路の場合、１６年に亘り見守る、つなぐという活動が必要になっている訳です。

ぜひ局長さんには住民の皆さんに「早く元の生活に戻りたい」という思いがあるのは重々承知の上で、１０数年続くということもみんなで覚悟しなくてはならないということもあるので、ぜひ、今後一緒になってどうやっていったらいいのかを考えていく必要があるのかなと思います。

さて、考えていくという流れの中で、昨今の動きというか、阪神・淡路の時になかった仕組みに NPO、特定非営利活動法人というものがあります。実はこれ、神戸の時から市民活動していた方が議員立法として「市民活動促進法」という法律を作ろうとして、紆余曲折ありそれができなくて、代わりに「特定非営利活動法」という法律ができました。その中で生まれてきた新しい法人格、ＮＰＯ法人、正確には特定非営利特定法人ということで、あちこちで活動が盛んになり、市民活動でさまざまな災害のお手伝い、復旧のお手伝いとか、一部分を担うとか、さまざまな形がございました。今回はその立場、ＮＰＯ法人ザ・ピープルの甘南備（かんなび）さん、珍しいお名前ですよね、お話をいただきたいと思います。

【甘南備】

ＮＰＯ法人ザ・ピープルで事務局長をしております、甘南備かほると申します。どうぞよろしくお願いいたします。自己紹介ということですので、ザ・ピープルのことをお話ししたいと思います。ザ・ピープルは平成２年にスタートしてもう２２年、古着のリサイクル活動を基盤として海外支援、障がい者支援、もちろん環境の問題について、市民運動的なもので活動してきて、ＮＰＯになって７年程なんですが、全国から集まってくる古着はものすごい量なんですよ。１か月１８ｔ、想像つかないと思うんですが（笑）とにかく福島県を古着を燃やさない県にしようということを目標に活動しています。集まってきた古着はどうするの？とお思いでしょうが、およそ２０％近くが再利用できるものなので、形を変えることなく活用ということで、私たちは古着屋を５店舗経営しておりまして、震災で２店舗つぶしてしまいましたが、ガチャガチャになってしまいまして…。よって３店舗で格安で皆さんに提供する部分と、それからバザーを大体年間３０回ほど開催しておりますので、そこであがった収益で海外支援を行う、市民活動を行うという活動をしてきております。普通古着の業界というのはだいたい３％位がリサイクル率といわれているんですね。でもピープルの場合は９３％くらいはリサイクルしている。７パーセントくらいは燃さざるを得ないので、キロ当たり１０円くらいのお金をかけて燃やすんですけども。半分

くらいは、障がい者施設にウエス材としてお渡ししたり、お店で販売したりで消費できるんですけども、残り５０％くらいはもう形がおかしいとか、時代遅れだっていうようなもので、どうしても海外にやらざるを得なくて送っているところなんですが、そこに私たちは疑問を持っていまして、私たちが着られなくなったものを半ば押し付けるようにしてお渡しすることが本当のリサイクルではないでしょう？と、自分のところで活用するのが本来だと悩んでいたところに、新しいリサイクルの方向が出てきましたので、平成２４年度に関しては海外に渡さないでいくようなリサイクルルートが見出されてきたような状況です。

こうした活動のなかで迎えた私たちの３．１１でしたけれども、当初自分たちの持っているものを、古着だとか、靴だとかを、被災者の方にお渡ししていくことなどをいたしました。震災直後に丁度兵庫県の業者さんがロールカーペットをトラック一台で「ぜひどうぞ」ということで受けるところがないので平の競輪場に搬入したんですが、１週間後に行ったらそれが山積みになってて、全然配布になってなかったということで、私たちは緊急車両の登録を済ませたマイクロバスを入手しまして、品物を受け取りながらそのロールカーペットを小名浜地区の避難所に配って歩いたと、そういうことがありました。

そういうことを行う中で、行政の支援物資は、決して一人ひとりの要望に合ったものが行われているわけではないんだなということがわかりました。当時ピープルには、全国からものすごい量の下着類、食器など届いてまして、競輪場の物資とで御用聞きのようにずっと回って歩きました。それから避難所ではいろんな方々がご飯を作って提供したと思うんですけども、私たちは、３月２５日くらいに九州のからいらしたＮＰＯさんに「やる気があるなら経済的なものは支援しますので、４か所か５か所の避難所を選び出してください。その方々が自炊をするなら、必要なものすべてを提供します」とのことでしたので、駈けずり回って４か所を決めました。「自分たちで調理するんですよ、その代り私たちはガスでもまな板でも大きな鍋でもなんでも持っていきますよ」ということで自炊が４月１日からスタートしまして、６月末までに２万食の食材の提供をすることができました。

それから、すでにいわき市では「いわき市災害救援ＶＣ」というものが立ち上がっていました。自分たちは自分たちなりにやってきたんですが、被災者の皆さんの要望、「うちの中のこういうものを片付けてほしい」とか「がれきを片付けてほしい」とかは最初の時点では私たちには安心して頼めないというか、行政などとつながりもなかったものですから。そこで、私たちは社協とつながりを持ちましょう、連携、協働をしましょうということで、いわき市社協の傘下に入り、支部的な部分を担うという形で「いわき市小名浜地区災害ボランティアセンター」というのを立ち上げました。３か月で全国から３８００名のボランティアの方が駆けつけてくださいました。こうしたボランティアの支援に関して私たちはズブの素人でしたので、立ち上げたのはいいけど、どうしようもない。でも九州・沖縄の社協の人たちが全部コーディネートしてくださいまして、スムーズに災害ボランティアセンター機能を果たすことができました。本当に連携することによって全てのことが解決していくんだなあということが分かりました。

そして、だいたいの（災害復旧）ニーズが落ち着いてきたところで８月からは名称を「小名浜地区復興支援ボランティアセンター」という、主に心のケアなどの事業を持つセンターに切り替えてきました。ただ、それだけでは町の中に散らばってしまった避難者、いわきには８町から２万人以上の人が入っていてその方々に必要な情報が全然入っていないということが分かりましたので、小名浜の街の中に交流サロンというのを作りました。ここには常設で、民生委員さんも１週間にいっぺん来て下さる、自治会長さんとも連携が取れますよ、包括支援センターもしょっちゅう来てくれますよ、という交流サロンを

やりまして、他の地区と違い、いわきの場合津波・地震という中でどうしてもやらざるを得ないという、そういう施設が小名浜地区交流サロンというものでした。以上です。

【長谷部】
　ありがとうございます。古着のリサイクルに取り組んでいらっしゃったＮＰＯで、災害ボランティアセンターを手掛けたという非常に珍しいパターンだなと、あまりにもジャンルが違うな、と私なんか思ってしまったんですけども、災害ボランティアセンターの運営を、自分たちでやっていくんだ、と思われはったきっかけなんかありますか？

【甘南備】
　もちろんわたしたちＮＰＯの中には定款というものがありまして、その定款の中には「災害救援活動」というのが入っておりました。震災が起こる以前から、ＮＰＯ法人になる以前から古着というものを災害時に役立てる機会がたくさんございました。
　最初はナホトカ号の日本海での石油流出事故だと思うんですけども、防寒着がどうしてもほしいという依頼が入りまして、私たちは１週間くらいの間に１００着位の古着を向こうに送るという作業をしました。それから市役所のほうで、火災があって２０世帯くらいの方が被災したんだけれども、すべて焼かれてしまったので、下着から、ズボンから、おじいさんが何人、おばあさんが何人、若い人が何人と、それが朝の時点でしたが、昼までかかりましたが１００着以上の古着を届けるという、フットワークの軽さだけは今までにもっていました。震災の時も起こると同時にすんなりとできたのかなと思います。

【長谷部】
　特に組織の中で「それうちの仕事とちゃうんちゃう？」みたいな話はでなかったですか。むしろ「やっていくんだ」という雰囲気ですか？

【甘南備】
　ええ、とくに異論は出ませんでした。すんなり「それではやりましょう」という感じでした。

【長谷部】
　私、実は９７年のロシアタンカーの石油流出事故の時に現地ボランティアセンターの立ち上げを担当しているんですね。ということで、もしかすると古着を送っていただいた側かもしれないと思ったんですが（笑）
　もう１つ伺いたいのは、日ごろＮＰＯ法人として活動されていて、今回社協と組んでボランティアセンターを運営しようとされた。中には独自でボランティアセンターやるんだというところもいくつかある中で、「社協と組んで」とお考えになった理由はなんだったですか？

【甘南備】
　先ほども少し触れましたが、被災者の皆さんのプライバシーの部分に関わることに立ち入る活動について、なかなかピープルに「お願いします」とは来ていただけなかったんですね。そういう実情を分か

ったうえで、被災者の皆さんが安心して依頼できる、安心できる存在になるためには社協との連携なしには無理だろうと思ったんです。

【長谷部】
もともとお知り合いがいらしたとかありました？

【甘南備】
　いやー、社協とはあんまり（苦笑）

【長谷部】
　あえて扉をたたかれたと。

【甘南備】
　そうです。

【長谷部】
　ありがとうございました。それでは大変お待たせしました。加藤さん。連合福島の活動ですね。お願いいたします。

【加藤】
　みなさまお世話になります。連合福島で副事務局長をしております加藤です。報告させていただければと思います。まずレジュメで連合というのはどういう組織なのか触れさせていただいております。連合というのは１９８９年に結成されました、日本の労働組合のナショナルセンターです。中央の労働団体であります。現在５４の構成組織、これは産業別労働組合なんですが、これが加盟いたしまして、全国４７都道府県に地方連合会というのを設置してございます。全国各地の会員数は６８０万人ほどおりまして、全ての働くひとの暮らしと雇用を守る取組を現在進めているところでございます。
　今回、ボランティアに関する取組に関しましては、発災直後から連合本部、各構成組織、４７都道府県にボランティア派遣関係の準備を要請するとともに、最も被害の大きかった岩手・宮城・福島の被災各県に先遣隊を派遣しまして、各県地方連合会とも調整しながら支援の検討をすすめました。この部分につきましては３月中旬に福島にも連合本部から先遣隊２名が我々のほうに来まして、まずは今日ここにお越しの相馬市災害ボランティアセンターの今野所長さん達と今後どのようなボランティアをやっていけばいいでしょうかとか、人数的にどういう風に取り組んでいけばいいでしょうというように、それから宿泊部分、ベースキャンプということで宿泊場所を探すにもいろいろ苦労しました。なお、連合のボランティア派遣するにあたっては一定人数を連続的に派遣できる労働組合に対し強い期待が寄せられまして、また、早期の派遣を要請されたという経緯がございます。
　そして最終的にここ福島県につきましては、福島、いわき、会津若松の３拠点にベースキャンプとして宿泊地を準備し、３月３１日から第一陣受け入れしまして７月３０日までボランティア受け入れ、１４３８名、延べ９，３７８名の方が福島で復旧関係の活動に関わってくださいました。前半３か月は現

地滞在７日間、後半については滞在５日間で活動しました。我々福島県の構成組織も「他県から色々応援をもらっているんだ、我々福島も何かしなくては」と確認しまして、５月２９日から７月３１日まで、われわれ連合福島の取組として新地町災害ＶＣに産業別に５名、３泊４日を基本としてスタッフ派遣、現地での運営に取り組んできました。

さらに我々は県内各地に地区連合という組織があるわけなんですが、各社会福祉協議会と連携しながらボランティア活動を行ってきたわけでございます。とりわけ、会津若松につきましては、今日、渡辺さんいらっしゃいますが、大熊町（社協）が入ってくる前の会津若松支援物資センターで、物資の仕分け、また物資を取りに来た方への配布を行ってきました。最終的に相馬市、新地町、南相馬市、会津若松市支援物資センター、いわき市災害救援ＶＣへのボランティア派遣、郡山ではハートネットふくしまさんと連携しまして炊出しボランティア、こちらは郡山で前日に野菜を切って、翌日県内のどこどこ避難所で炊き出しをするぞと、そういった活動をしてきました。今日の会場でありますパルセいいざかにも避難所でしたので、炊出しボランティアとして、玄関先で豚汁やスープなど炊出しをしてきました。

以上我々としては全国のボランティアを受け入れてやってきたということで、私的には事務局として３月から７月まで、福島市の拠点であります福島県労働福祉会館、ちょうど福島県宮町、公会堂の向かいにありまして、ろうきんさんが入っている建物ですけれども、ここの５階の会議室にですね、ブルーシートを敷いて、雑魚寝で泊まり込みでボランティアに行ったという状況です。岩手・宮城・福島の連合としての取組、主な活動、拠点などは冊子にまとまっておりますので、あとでご覧いただければと思います。

【長谷部】

ありがとうございます。いわば連合のコーディネーターがお役目ということになりますかね。

【加藤】

そうですね、全国から構成組織、地方連合会が入ってくる中で、各ボランティアセンターさんと活動日数、日々どのくらいの人数が必要ですか、という業務調整、それから食事の手配、交通手段の手配など、コーディネーターというよりも、事務局的な部分で派遣されたボランティアの方が活動をしやすいようにという環境づくりの部分で、われわれお手伝いさせていただいたという事でしょうか。

【長谷部】

連合という組織の中で、ボランティアに活動する方々が全国から集まってくるわけですけれども、イメージとしてどっちかということをお伺いしたいんですが、「たくさん手が上がってその方々の中で順番待っていただくような状況」だったのか「人がなかなか集まらなくて困ったような状況」だったのかどっちだったでしょう？

【加藤】

あの、色々聞きますけども、まず先陣部隊がきて帰っていきますよね。「こういう活動してきたんだ」と引き継がれていくみたいなんですね。すると「来たい！」と手が上がったと。ただ、我々としても受け入れに際して、宿泊施設、ボランティアセンターの状況、限度があるもんですから、「本当は来たかっ

たけど来られなかった」という方がいたのかもしれせんし、例えばその方々を岩手、宮城の必要としている所に回していくような調整を、これは連合本部のほうで行っておりましたので、本部の方も大変苦労したんだと思います。

【長谷部】
　なるほど。わたくし社会福祉協議会で働いておりますので、ある程度災害対応とか、コミュニティ支援とか、住民支援とか、業務的にある程度理解しているはずなんですね。まあ社協職員にもいろいろな業務内容ありますけども。それに対して、連合さんから災害ボランティアセンターに派遣して運営に関わる活動をするという、言ってみれば初めて経験するという方もいらっしゃるでしょう？そんな中でこういう不安があったとか、ここで困ったとか、意外とこういうスキルが役に立ったとか、そういう活動した人たちのことを教えていただけますか？

【加藤】
　福島県の構成組織としては、独自でボランティア活動をされたところもあるんですが、一方、大部分の産別については自分の組織内での対応などもあったもんですから、なかなか…。月数が経過するにしたがって「全国の人からだけではなくって、自分たちも頑張らなくてはいけないんじゃないか」という思いもありまして、最終的には人数の調整をしながら５名体制を作って新地町災害ＶＣのスタッフとしてやってきました。役割としては総務班、ニーズ・マッチング班、資材運搬班ということで、事前に新地町災害ＶＣと打ち合わせしまして、この班についてはこういう業務内容で活動するんですよと、まあ福島県内の構成組織から構成組織へという引継ぎでもありましたし、一日目、初めは何をやっていいのか大変だったと思いますけども２日、３日目と自分がするべきことが分かってきて、みんないきいきとやっていたということです。苦労したという話は特段聞かなかったですし、現地の方、いろんな方と触れ合うことで素晴らしい経験をしたという話をたくさん聞いてございます。
　私もニーズの担当として業務に立ち会わせて頂きましたし、件数が少なかったもんですから、１件自分でもボランティアとして家財道具の運びだしをやりました。丁度私が入った時は気温３５度、とっても暑かったんですよね。３０分やれば２０分くらい休みながら、家主さんと話したりしてやっているうちに「喜んでもらいたい」、「何とかきれいにして差し上げたい」と思いました。非常に素晴らしい体験だったと感じています。

【長谷部】
　その連合さんを相馬で受け入れしはったわけですよね。あの、労働組合からのスタッフ受け入れということですよね。社協での普段の仕事だと、自分とこの職員とチームを組んで仕事しているわけですよね。それが外の人とチームを組んで１つのプロジェクトを動かす、ボランティアセンターというものをうまく回していくというのはそれなりのハードルがあるんだと思うんですけれども。逆にハードルがなければどこでも成功すると思うんですよね。連合さんに来ていただいてこういうところが助かったとか、こういう効果があったとかありましたら、少しセンター長からお話しいただきたいのですが。

【今野】

はい。実は災害ボランティアセンターを立ち上げたとき 11 名しかスタッフがいませんでした。どこかお願いできるとこないのかなあと思っていたのですが…実は地区連合さんとはつながってたんです。日々の業務の中で地区連合さんにはご協力いただいてましたんで、お声掛けをしたら 3 月 26 日から加藤さんに来ていただいて、連合本部からの応援ということで。

最初は難しい…というか何をしていただこうか、どんなことができるかなあ、と手探りでいたのですが、最終的には送り出しの部分を全部連合さんにお願いしました。それから資材の整理系。来ていただいた方々は、電気連合さんだったようで、エアコン調子悪かったら自分で直してくれたり、資材を的確にきっちり揃えてくれるとか、かなり強力なスタッフでした。

【長谷部】

送り出しってたぶん会場のみなさんちょっとイメージが付きにくいと思うんですが具体的にはどんな業務なんですか？

【今野】

えっと、ボランティアさんの行く場所が決まったら、オリエンテーションと言って注意事項を伝えたり、活動に持っていく必要がある資材の数をそろえたりと、活動先にうまく導いてくれる班を「送り出し班」といいます。

【長谷部】

つまり、被災者の方の手助けをしたいと思って相馬に来られたボランティアが、自分で困っている方を探すのではなくて、行き先を紹介してくれる場としてボランティアセンターを使われるわけですよね。それを、ボランティアの方の気持ちを汲んで、的確な被災者の方の元に送り出す、そういう役割を初めての連合さんにやっていただいて、それでもきちっとできたということなんで、普段の仕事のしかたとか、その活かし方というのがすごく大きかったんじゃないかと。相馬のボラセンの事例を聞くたびに、そのあたりの連携がよくできていたんだろうなと考えます。いわば地区連合さんにお声掛けした、つまり「来てください」と。この部分をやってほしいと。先ほどのピープルさんの場合だと社協の門を叩いたわけですよね。これ、どっちが動いたかというと全く逆な状況なんですけども、加藤さん、実際に相馬のスタッフやって、と言われたときはどうでした？自信ありでした？

【加藤さん】

実際には最初多分不安があったと思うんです。でもね、入ってきた方たちの中に神戸の震災の時にボランティアに行ってた方が結構いらっしゃったもんですから、うまく行けたのかなと。また、継続的に組織の中でつながっていったんで、うまい具合にできたのかなって…。

でも最初の受け入れの時は大変だったですよ。1 日目。泊まる場所も見つからないで公民館で寝泊まりして、床んとこに段ボール敷いて、毛布かけて寝たんですけども、寒くて起きちゃったと。翌日からはなんとか場所を見つけて継続して相馬に入って頂いて、となりました。

【長谷部】

なるほど。たぶん床に段ボールを敷いて毛布で寝るという生活、長く継続できないなという考えでの判断があったと思うんですが。先ほど少しピープルさんの話の中に、９７年のロシアタンカー原油流出事故の話も出てきましたけれども、私これまで１３か所の災害ボランティアセンターの立ち上げや運営にかかわっておりますけれども、その中ですごく大切にしていること、思っていることがありまして、私の関わった１３か所のボランティアセンターの中で、実は３名の方がお亡くなりになっています。非常にそこ、私の中で大きな十字架になっている部分があって、やはり床に段ボール敷いて寝る、最初に亡くなられた方は、まさに寒い中、車中泊していらっしゃって心臓マヒで亡くなったんですが、車で寝泊まりする中でボランティア活動をするということに対する抵抗感が、私非常に強いんですね。

ボランティアさんがけがをしない、安全に活動できることがすごく大事なことだと思っていて、もっと言えば、「あなたが健康で安全にけがなく帰る」ことってすごく大切で、「ウチに来てくれたボランティアさんが亡くなった」とか「ウチに来てくれたボランティアさんがけがをした」というような負担を被災した方に余計にかけてはいけないと思っているんです。そういう意味で連合が活動するうえできちんと寝るところを用意しなくてはいけない、と事務局もお悩みになったと思うんですが、同じように相馬で活動されるボランティアさん、大熊で活動されるボランティアさんが安全で健康に活動していただきたいという思いは当然あると思うのですが、そのあたりでこんなことを意識してやっていたとか、今野さん、特に夏の時期のボランティアさんに対し、こんなこと気になっていたってことありますか？

【今野】

実はね、長谷部さん先ほど車中泊の話されたんですが、実はうち（野外泊の場合）「車中泊」しかＯＫしてなかったんです。放射能のことがあって情報も十分じゃなかったもんですから、テント泊だと夜中に雨が降ったりしてずぶ濡れになる恐れがあると。雨にぬれると被ばくするんじゃないかと。だからそういう意味で「車中泊しかダメですよ」と。

夏になると脱水症とか熱中症とかなんですが、1時間やったら何分休みじゃないですよと。疲れたらすぐ休むと。それからありがたかったのが、ボランティアとして相馬に入った方が大量に塩飴を送ってきてくれたり、ミネラルウォーターやスポーツドリンクを送ってくれたり。実は連合さんでスタッフで入った方々も帰った後でも塩飴とか。ずーっと続けてくれてたんです。そんなことで、大量に塩飴を持って行っていただくとかはずっと気にしてました。

【長谷部】

もちろんあれだけ激しい活動をするわけですから、怪我が全くないというわけにはいかないでしょうし、熱中症で倒れられる方というのももちろんいらっしゃったと思うんですが、福島県県下、岩手宮城と比べると、とっても安全に気を使ってくださった県で、去年の活動が非常に盛んな時期にね、他県に比べけが人の数が劇的に少ないんです。だってボランティアセンターの数でいったら福島県がダントツに多いですからね。内陸のほうにもできていますから。これだけ多くの場所にボランティアセンターが設置され、活動が行われたにも関わらず、けが人がこれだけ少ない、もっと言えば亡くなった方が１人もいらっしゃらないというのは、これってすごい皆さんがすごく頑張ってくださったところだと思います。ここは福島の各センターがとっても自慢できることやと思うんですね。県民の皆さんは、来てくださった方々が安全に健康に活動していただいて、それが被災者のためになるんだということをすごく気

遣っていただいた。そのことはみなさんに胸を張っていただきたいな、そういうセンターが私の町にあったとずっと大事にしていただきたいと思っているわけなんですが…。

さあ、被災時からの泥かきのようなボランティア活動が一定収束してきたわけなんですね。もちろんタイミングはずれてきます。これからも警戒区域がどうなるかとかそういうことも考えていくと、もう一回泥かきのような活動が必要になるパターンも福島は持っているわけなんですけれども、そうはいってもそれはいつになるかわからないという実情もあるので、今はコニュニティをつないでいく、という部分に非常に大きなウエイトをかけた活動が各センターで行われているわけなんですけれども、ちょっと安心している部分があるんです。

実は先週 NHK の番組で「仮設住宅で人がお亡くなりになって」という特集をしている番組がありました。被災して、仮設が当たって、仮設に入って、一人暮らしの方がお亡くなりになって、とニュースだったんですが、その方がお亡くなりになったというか、発見されたのがお亡くなりになった翌日だったんですね。正直言いますと、仮に僕が家で倒れて亡くなったとしても、その日のうちに気づいてもらえないということってあり得ると思うんですね。その日のうちに発見してもらえるって非常にラッキーで翌日見つかることってふつうにあると思うんですね。仮設住宅が現場だったのでニュースに、特集になっているというだけです。これがニュースになっているということは、本当に長い間発見されないとか、コミュニティが分断されててすごく孤立した生活が行われているという状況があるなら、あれはニュースにならないんじゃないかなとおもってるんです。

それを支えてくださっているのが生活支援相談員という仕事がございます。ほかにもいろんな仕組みありますけども。被災者の方と被災者の方をつないでいくという活動とか、孤立しないためにはどうしたらよいかということに熱心に取り組んでいただいている活動を少しお話しいただきたいなと思いまして、そのうえでここが課題やぞというところをぜひ渡辺さんにお話いただきたいんですが、生活支援相談員の活動のアウトラインとここが課題やと、それから生活支援相談員だけでなく、会場の皆さんのようなボランティアの方々にもこういうことを意識して欲しいんだということがあればお願いいたします。

【渡辺】

まあ、まず生活支援相談員そのものなんですが、すでにみなさんご存じのところもあると思うんですが、福祉の関係機関とのつなぎ、あるいは、日常の生活の中での不便などの聞き役といいますか、そういう部分があって、どうしても外に出ない、孤立される人たちをひとつの場に出していきたいというのが生活支援相談員の役目なのかなと。

そのなかで、どうしても外に出たがらないという方いらっしゃいますよね。今日会場に来てる方、普段家から出ないという日はないのかなと思うんですが…。今日出る時も思いました。朝集まってみて私もですが男って役に立たないなと。今日の表彰者一覧みても男性少ないですよね。女性が一所懸命やってる。こうした方の力を借りるという部分では、たとえばお話相手になってくれる人を見つけるとか、ボランティアさんを見つけるとか、生活支援支援相談員がそういうところのつなぎをやっていくというところで動かなくてはならないかな、事務局としてはそういうところが課題かなと思ってます。

まあ、うちのほうでは８月から動き始まってるんですが、生活支援相談員自体がやはりひとつの、心のわだかまりというか、病みを持ってき始まっているなというのがあるんですね。ではどう解いてやるかということになると、端的に心のケアの先生とお話しするだけで済むわけではないのかなと。私よく

言うんですが、今日ここであったことを外まで引っ張っちゃうと、「ああ明日だめだな」と思うんで、事務所を出て「ハイ、サヨナラ」と言ったら一旦仕事を忘れて帰ろうかなというのが私のやり方だったんで、そういったことも一つの解放といいますかね、支援相談員のミーティングに入った時なんかは「じゃあ今日はなんかあったんだったら、忘れてしまうためにお酒を飲もうか」とかいう話にもなるんですけども。それが今までの自分のグラウンドだったら簡単にできたんですけども、自分のグラウンドでない、いや、いつも世話になってる会津の方にそういうこと言ったら「そう思って過ごさないと駄目だよ」と言われると思うんですが、なかなか溶け込めない部分もあって、生活支援相談員から病みを取ってあげないと逆に相談業務になっていかないのかなと。

それから訪問している人に出てきているのが、自分に知り合いがない、付き合いがないという形で、相談員にその心を求めてくるという方が出てき始まったというのと、ん一、何と言いますか、避難はたしかに被害者なので、他人に当たるという部分があると思うんですけれども、それがいつまでも自立できない考え方が心の隅に残っているというのをどう取り除くか。支援相談員にとってもその辺が悩みになってきていると思うんですよね。ですからこれからの相談員の活動の中ではまず相談員自身の悩みの部分をどうとらえるか。ミーティングのなかで振り返りをできるだけしていきたいなということもあるし、たとえばサロン一つにしても相談員が自分たちだけがやるんではなくて、こういうところにこういうつなぎができないか、というような、ボランティアセンターを使っていく考えをしていかなくてはならないし、ボランティアさん自身に我々もつないでいきたいと思っています。そこの道筋をつけていくのがこれからの課題なのかなと。特に長くなるという部分がありますので。

【長谷部】
局長自身はこの会津やいわきでの生活が長くなると予想されているということがありましたが、どのくらいの期間のイメージでいらっしゃいますか？

【渡辺】
まあ一…。その答えを出すというのが、ものすごく厳しいと思います。

【長谷部】
そのくらい長いと考えていらっしゃる。

【渡辺】
思います。

【長谷部】
（避難期間について語るときに）出ている数字というのは、２年３か月という仮設住宅の期間とか、比較的年単位の期間が出ていますが、そんな短くは済まないという認識。

【渡辺】
自分としての考え方としては、正直１０年、２０年の長いスパンになるだろうと思ってます。で、今

の放射能の除染の、環境省の基準の示し方から言ってもズルズルっと来ている部分もあるし、現時点で２５件の除染の試行もされてますけども、なかなか思い切っていっていない。それからあまりにも放射線の数値の示し方、地域の放射線量に対しての敏感さというか、こだわる部分を考えると長くなっていくのかなと。０コンマ以下の数字でいっても戻らないということですから。自分たちのところはものすごい数字になってますんで。正直時間もいたところで、自宅に帰りますと３７マイクロシーベルトくらい浴びちゃいますんで。そうなると時間換算していくと年間なんぼというのも出てしまいますし。時々文科省の数字で示される「（放射線量が）高い」といわれる地域に入っていますしね。そうなると正直、自分の（大熊町に）ある家に行って生活は望めないのかなと。そうすると、自分がどこまで仕事としての関わりをするかは別として、長谷部さんがいうように長期的展望というのも少しづつ計画性をもっていかないと。それはもちろん社協自体だけでできるものではないし、各自の考え方の中にも入っていかなくてはならない部分となれば、行政と一体となってやっていかないといけない部分なのかなと思っております。

【長谷部】
仮に１０年、２０年という単位があるだろうというお話でしたが、もしもみなさんのお家の隣に引っ越してきた人が、まあ、１０年間引っ越してきたというようなイメージなんですね。まあ、確定なのは２年３か月ですよ。その人たちを「たまたまここにきている仮住まいの人」と捉えるか、「１０年この町で一緒に暮らす人」と考えるのか。これ、やっぱり考えなくてはいけないとこだと思うんですよね。

例えば、京都みたいな街は学生がやたら多いんですね、人口の中で。そうすると、コミュニティの中の一員として、たとえばゴミ出しのルールを守るとか、地域の行事に参加してもらうとか、これ、やっぱりたった３年、４年しか住まない学生たちであっても巻き込んでいって当然なんですね。

おそらくね、福島も３年、４年でポッとその人たちが出て行っちゃうって、殆どないわけですよ。仮に大熊の住人さんやったとしても、今は会津におるんやから、会津のいろんなことに積極的に参加してもらおと。仮住まいかもしれへんけど会津の人としての楽しみも味わってもらお、と受け入れた側も思っていかなあかんと思うんですね。で、これは実は行政が思うことでも、社協の事務局がおもうことでもなくて、一人ひとり近所に住んでいる人たちが「あの人たちここに今おるだけやから」と捉えるんではなくて「あの人ら今はここの住民なんや。いつかは帰りたいと思っているかもしれないけど、今はここの住人なんや」と捉えなくてはいけないという、新しいタイプの災害対応が今回なんだと思うんですよね。これ過去にはないんですね。阪神・淡路でもまったくないわけではないんですけれども…。

こんなことがありました。神戸に住民票を置いたまま隣の、そのまた隣の市に引っ越していた４年目、市がもういい加減に住民票をうちの街に移してくださいと個別にお話をされたそうなんです。「元の街と縁を切れ」と言われた、というようにご本人はお取りになった。非常につらいですよね。だけど、受け入れた側はそういう意図ではないんですよ。たとえば住民健診。たとえば地元のごみ収集のルール、お祭りのルール。色んなことに堂々と入っていただくにはそれしかないんだと。決して冷たい言い方ではなかったんですね。だけど、神戸から住民票を移すことに抵抗のあるその人の気持ちもすごく分かると。そういう話し合いが行われたんですよ。でも阪神ではそういうケース、ほんとに少ないんです。今回はむしろそっちのほうが福島にとっては一般的でしょう？どうやって受け入れをしていくのか、どうやって地域の住民として、一緒にやっていくのか。ここはやっぱりこれから先、テクニックかもしれないし、

心理的なものかもしれないし、色々考えなくてはいけないと思うんですが。
　さて甘南備さん、一番たくさんの町から、一番たくさんの人が恐らく住民票のないまま仮住まいされているいわきで活動されているわけなんですが、外の人たちを地元の人たちとつなぐ難しさなのか、それとも意外と簡単だよという話なのか、その辺のこと聞かせていただければと思うのですが。

【甘南備】
　私のほうでも、地域とのつながりを作っていかないと、将来的にも、期間が長くなればなるほど住民間の心理的軋轢が生じていくのが目に見えてたんですね。実際に、（避難者の方がおっしゃるに）すれ違っても「（いわきの方が）私たちのことをジロッとみるんだ」と。相手は相手で「いや、私のほうはあいさつしようと思っているけれど、かえって向こうがこっちをジロッとみてる」というような。

【長谷部】
　お互いそう思ってはったんですね。

【甘南備】
　そう、お互いに。で、私たちは仮設の中だけに支援をするってことは簡単なことではあるんですね。全国からマッサージやりたい、カットサロンやりたい、音楽を聴かせたいという、要望がたくさんございますので、それをそっちこっちに交渉していくんですが。それで、仮設の１か月の予定表を見せていただきました。そしたら１か月ダーッとみんな埋まってるんですね。入る余地がないほど、仮設住宅には支援の手が差し伸べられています。ただ、私たちはそれだけではなくて、地域ともつながりを持っていかなくてはいけないだろうと。
　これは私、本当にモデル的な活動ができたなと自負しているんですが、泉という地区に富岡町の仮設住宅が２００戸ほどあって２５０人ほどいらっしゃるんですが、それを囲むようにして泉玉露地域と言って、新興住宅地域ですけれども、たくさんの方々が住んでおります。最初、私は自治会長さんですとか区長さんたちに「どうでしょうか、仮設住宅の中だけで行事をやるのではなくて、地域の公民館で行事をやってみたいんですけど」と、区長さんにもっていきました。地域内に４つの区があるんですがどの区の区長さんも「それは無理でしょう。仮設だけでやったら如何ですか」と、そんな感じだったんですが、「まあまあ、区長さん、そんなこと言わないで。やってみましょう。やるんだったらピープルが音頭を取りますから…」と交渉して、地元の婦人会も「ではやりましょう」と協力してくれて、区長会では「じゃあ回覧板全部回すよ」と３００枚、４００枚くらいの回覧板をすべて回してくださいましてね、１月２８日に「お雑煮交流会」というのを地区の公民館で開催しました。
　お餅は山形の庄内ファームというところから、５００か６００食くらい来たかしらね。それから愛媛県の内子町というところからも、野菜もお餅もいっぱい届きました。そういう形で、前日に富岡の女性たちに料理をしていただいて、当日は（いわきの）婦人会の人たちが全部焼く、少年野球団の子供たちが夢中になってお餅を焼く、というような分担を決めまして、もう本当にすごい行事を持つことができました。後になってから自治会長さんも区長さんも「いやあ、本当に良かったよ。今後もまたこういう形で続けていきたいね」という話になったんですね。私たちはこれをモデルケースにして、私たちどうしても小名浜を中心にしちゃうんですが、大熊町さんの仮設住宅が小名浜にたくさん出来たばかり。こ

れからだいたい３月末までに大体の方々がそろうかなと思ってるんですが、そことも話し合いをしながらやっていきたい。
　ただね、最初から「地元の活動にどうぞ」っていってもなかなかダメなんです。泉でもね、「ふるさと祭り」というのがあって、そのふるさと祭りの実行委員の方々が招待状に商品券１０００円もって仮設に持ってったら、まだ来て２か月もたたないときだからか、１０人も出てこなかったということで、商店街の方々はがっかりして「もう俺らは支援しないよ」って。だから、焦って「さあ、みなさん、出てきてください」といってもダメなんですねぇ。仮設は仮設のなかでお互いにやっていく、支援していくような形をとりながら、何か月かたったときに外に出て、たとえば私が考えているのはおむすび持参の芋煮会とか、おむすび持参のピクニック会とか、そういう形で表に出ていただくような行事を持てたらなあと思っております。

【長谷部さん】
　なるほど。あんまり早い時期にお声掛けしてもなかなか出てきてくれなかったと、そういうことなんですね。あの、一方でね、セオリーとしてはね、なるべく早く引っ張り出さなきゃいかんという声もあったわけです。なかなかそれはうまくいかない部分もあると。元々そういう、先ほどのね、炊き出しをね、してあげるんじゃなくて、したい人に協力しますとか、今回みたいに地元の人たちとうまくつなごうとか、非常にねよく勉強をなさっているなというか、経験なさっているなあと感じるのですが、それは日ごろの市民活動から培われたものなんですか？それともアドバイザーのような方がいらっしゃるんですか？

【甘南備】
　いや、特別に学んできたわけではないんですが、震災直後から避難所に入ったり、仮設住宅に入って行ったりするなかで、「こういうことが必要じゃないかしら？」っていうことを気づいてきたところです。

【長谷部】
　なるほど。加藤さんね、連合さんとして外から、４７都道府県からいろんな方々が支援に入って、加藤さんのところを通って現場に出て行く流れの中で、「もう俺が全部してあげたいねん」とか、とにかくしてあげたい、してあげたいという希望を持たれたボランティアさんがいらっしゃることがあると思うんですが、もう視点として違いますよね。甘南備さんの視点は、「できることは本人たちにしていただこう。本人たちのリズムで立ち上がってきていただこう。そこを後押しするんだ」という感じですよね。
　加藤さん、その「全部応援したい」という声に気づかせてあげないといけないという場面もあると思うんですが、そのあたりの難しさとか、テクニックとか教えていただければと思うんですが。

【加藤】
　実際ＮＰＯさんと炊き出しボランティアをやってみて、最初の趣旨っていうか、言われたのが、自分ら今は現地の避難所に行って炊き出しをやってますよと。ただ、いずれ何回かやっていく上での本来の目標というのは、避難所に入ってる誰かが「私も手伝うよ」と言ってくれて、最終的には「鍋とか具材とかを揃えてくれれば自分たちでやるからいいですよ」というような形にしたい、というのが炊き出し

ボランティアに関わる中でＮＰＯさんに聞いたことだったんです。私たちもボランティアというものが今回初めてだったじゃないですか。そうなったとき、逆に全てをやってあげるということが本当に大切だと思ったんですが、聞いてみて、違ったなということを炊き出しからも実感しました。

【長谷部さん】
　それに気づいてもらうって結構大変ですよね。あの、今日はボランティア活動やってますよ、って方が非常に多いと思うんですが、実はボランティア活動を始めたきっかけというのをアンケートとってみると、まあ、いろんな理由があるんですが、どこの地区でとっても平均的に多いのを大雑把にいうと、「誰々に誘われたから」というのが多いんですね。結局は誰かに誘われるとか、行ってみようぜと連れて行かれるとか、やってみませんか？と言われるとかっていうのが多いんですよ。一方、災害ボランティアだけはそうではなく「自分で行こう」という方が多いんです。そういう意味で、自分からどんどんやろうと思ってきはる人たちを受け入れるというのは非常に難しい部分とか、普段の社協のボランティアセンターに多い傾向である「声をかけたから活動に来てくれるようになった人」とはだいぶ違う人たちを、最初からだいぶ受け入れた災害ボランティアセンターから、今の生活復興ボランティアセンターといわれる、これからは、みなさんが地域の中で、できることを協力し合ってやっていきましょう、というセンターへの転換というのをやっていかれるわけですよね。
　今野さん、外からたくさんのボランティアさんが駆けつけてくれた時期から、地元への転換、もっと言えば住民活動としてのなりたちを支えていくということがこれから必要になってくると思うんですが、この転換が、もうある程度うまくいっているのか、それともまだまだそこまでいっていないのかというところを教えていただけたらと思うんですが。
　というのも、先週の朝日新聞の記事でもですね、「被災地のボランティアは減ってしまっている。この状況はよくない。」というような論調なんですけれども、僕、ちょっとそこは疑問なんですよね。これって外から来る人が減ってるって話でしょ、っていう話で、地元の人たちは地元の人たちで、仮設住宅の見守りの事とか、一緒になってお茶会やったり頑張っていると思っていて、その人数ってカウントされてないでしょ。この論調おかしいんじゃないかなって思ってるんですけどその辺どうでしょうかね？

【今野】
　大熊の渡辺局長からもお話ありましたけれども、災害の部分てどなたでもいいんです。人数が欲しい。県内、県外どんどんお願いしますと。ただ、生活復興になると違うんです。今度は地元のつながり、ボランティアさんも、地元のボランティアさんじゃないとどうしてもできない部分があるんです。お話ししやすい、話のきっかけをつくる、というと土地勘がないとどうしてもニュアンスがとれない。相馬の場合、８月１日に生活復興ボランティアセンターに切り替わった時点で県外募集を止めました。ただしイベントを希望するボランティアだけは入ってもらってますけれども。その他はお茶会にしろ、なんにしろ、地元のボランティアにどんどん関わってくださいと。地元の住民さんが関わらないと被災者の自立はないです、と地元にどんどん発信しているところです。

【長谷部】
　やはり言葉のニュアンスなどもありますよね。私、実は朝から飯坂で床屋に行って髪を切ってたんで

すけども、おばちゃんが「何々だべしか」っておっしゃってて、「だべしか」ってどういうニュアンスなんやろって…(笑)。いまいちわからなかったんで、会話に困ったりしたんですが、やっぱりその土地の言葉をしゃべって、その土地のことをよく知っていて、もっと言えばその土地で暮らしていく覚悟のある人とボランティア活動として関わっていくということが、今後すごく大事になっていくでしょうね。

【今野】
　そう思います。地元、相馬の場合ですね、仮設住宅に相馬市の他、飯館村さん、浪江町さん、大熊町さん、富岡町さん、双葉町さんも入っています。全部が同じ扱い。いまね、夜に給食出してるんです。仮設入居の希望者の方には夜、給食出すんですが、ほかの市町村だから出さないってことはない。全部同じに出してます。ほかの市町村だからどうのこうのではないんですが、そういう部分で皆同じなんですよということ、相馬市の場合は地域のコミュニティをもうちょっと大事にしていこうという部分で、せっかく相馬に来ていただいたのでなんでも一緒にやろうと。サポートセンターもできていますのでお風呂があります。このお風呂も、相馬の人でも飯館でも、どなたでも無料です。仮設のお風呂ってどうしても小さいから、ノビノビ入れないだろうということで、どなたでも無料で入れます。みんなで園芸をやったら地元のボランティアさんと交流してください、とかもやってます。

【長谷部】
　では、サポートセンターでやっている行事とかは、相馬の人以外もどんどん参加できると

【今野】
　はい。

【長谷部】
　そこは当初からそのスタンス？

【今野】
　そうです。

【長谷部】
　どうでしょう、飯館の方なんかは「ワシら行ってもええんやろか？」みたいな事はなく？

【今野】
　いや、むしろサポートセンターが他の市町村の仮設から近いとこに出来ていて、逆に相馬の人のほうが、「行っていいんだろうか？」といった感じです(笑)

【長谷部】
　いやね、みなさん。これって結構大事で、仮設住宅の中の運営の仕方って災害救助法で決まっているわけじゃないんですよ。というのはね、市町村の担当者が運用の中で、どういう風にやっていくのかっ

て判断することができるって事なんですね。まあ、県所管の部分もありますが。なんで、県をまたがったり、市町村をまたがると、「いえいえ、ここはうちの町の仮設ですから。センターですから。」なんてことがよくあり得る。で、そういうことに法的に問題があるかというとないわけです。運用は市町村で決めるから。

それから、晩御飯をお配りになっているというのも非常に珍しい例なんですね。仮設住宅で晩御飯を配っている。全国的にみると、避難所は食事が出るけど、仮設は食事が出ないという印象ありませんか？これ、メディアの方も報道の中でそういう風にいってはること結構ありますが、災害救助法上これは間違いです。あくまで被災者に対する食事の供給は、食事を手にすることが難しいかどうかで判断されます。これはお金ではなくて、近くに店があるか、ないか、とかで判断されるわけです。災害救助法上はね。なので、変な話近くにお店がある避難所でお弁当を配るのは本当はダメなんですね。一方で仮設住宅でも歩いて行ける範囲にお店がない場合なんかは、お弁当配って大丈夫なんですよ。私がお弁当出していい、食べ物配っていいというのは、つまり「国費の対象になるかどうか」、国がお金出してくれるかです。なので、変な話大熊町さんが会津若松に行って、会津若松の近所のお店開いてるってわけですよね。従来の災害救助法の考え方ならこの分みてもらえないですよ。そういうものが知らない間に避難所は弁当出て、仮設は弁当出ないにすり替わってしまっている、って話なんですね。それだけこんなに広範囲で人が動く災害想定にないということで、もちろん大熊町さんには、大熊町さんが会津若松市内の避難所で出されたお弁当も救助費の対象になっていますけども、例のないことに立ち向かっているということなんですね。

さて、お約束の時間が迫ってきていますけれども、もう一度４人の皆さんにお話しを伺いたいと思いますけども、これから先を考えるうえで、地域、今日のテーマは「これからの住民生活に向けたボランティアの関わり」ということですから、地元の皆さんに期待することですとか、住民の役割ってこういう事なんだよと、というのは、「外から来るのがボランティア」というムードが山ほどある中で、新聞社が「ボランティアが減っている」と言ってしまうように。これから先、地元に住んでいる人達にもこんな役目や役割があるんだよというご自身のお考えを少しお聞かせいただければと思うんですが、えー、ある種外から応援する立場、加藤さんからお聞かせ願いたいんですが。

【加藤】

地元の人ですね…難しいですね、受け入れの立場から。あの、今後の部分というとこからしますと、連合の方で今検討していたのが除染関係なんですよね。この除染関係についても今後どんな形で進めていくか。たぶん福島県の中では除染について大変興味を持ってらっしゃるでしょうし、わたしも先々週ちょうどここで労働局の主催する除染講習会を受けたんですけども、色々きめ細かい内容になっている訳なんですね。たぶん、いずれ地域で、行政によっても違うとは思うんですが、地区ごとにその除染関係やってくださいということで、一定の予算がついて、それを例えば各部落でやって行くことがあるかも知れないんですが、実はうちの地区では側溝掃除とか、そういう部分が３月１１日以降やられていない状況でありまして、こうした部分を今後どういった形でやっていくかっていう…。というのも、夏までの災害ボランティアに来ていたボランティアさんていうのは側溝の泥かき、みんなやっていたわけなんですよね。それがこちらでは進められていない、どういう風にやってったらいいんだろうなあというのが、うーん、悩みですね。

【長谷部】
　これから先も色々と悩みながらの活動になりますね…。ありがとうございます。それでは甘南備さん。
【甘南備】
　長谷部さんの質問に答えられているかどうか分からないんですが、私からは最後に２点ほど。救援物資の原則っていうのは、必要な時に必要なものを必要な量だけお渡しできるということ、これが原則だと思うんですが、今回の場合これが真逆になっていたじゃないかと思うんです。ですから、今後こういうことを実現するためのシステム作りを考えていく必要がある、ということをご理解いただきたいということ。
　それから、ピープルとしては、本来の事業なんですけれども、いわきも津波による塩害によって沿岸部の農地がほとんど被害を受けております。それから双葉の８町村の方たちは今回の原発で、いわきに２万人以上の方が自分の土地を離れて、農地をそのままにして離れてきている状況ですね。今後は残してきた土地をどうするかという課題もあると思いますが、（私たちの）地元に来た以上は、雇用の創出がこれからの大きな課題じゃないのかな、とピープルでは考えておりまして、それを今回独立行政法人地球環境基金という団体があるんですけども、ピープルではそこに震災枠で助成申請をしました。そしたら採択になりまして、「いわきオーガニックコットンプロジェクト」という、みなさんのお手元の資料にも載っておりますが、こういう事業をスタートさせることが出来ました。
　このオーガニックコットンプロジェクトは、綿の木をいわきだけでなく福島県全体でできたらうれしいなと事業展開している中で、この２５日には実際に農業生産者の方を長野県から招いて全国でオーガニックコットンを生産しているのは、この震災を受けて岩手、宮城でも生産を始めていますが、実際には滋賀県とか長野県とかって数か所しかないんですね。そういった中で、実際にバスツアーをやったり、講演会をやったりする中で、何人の方が手を挙げてくださるかなとおもいましたら、なんと３０人近い方が手を挙げてくださいまして、私は土地を提供しましょう、私は実際にやってみましょうと。それで若い方も、遠野という、いわきには山奥の阿武隈山系のすぐ下にある農村地帯があるんですけども、そこの若い青年たちが「それ以外に俺らが生きていく道はないわ」ということで、その部落をあげて研修というか学びに来るんですけどもね。そういったことで、農業の再生に、まあ、もちろんいわきの場合には漁業にも大きな問題があるんですけれども、まずは農業の再生に地元としては頑張っていきたいと思います。
【長谷部】
　ありがとうございます。それでは渡辺さん、お願いいたします。
【渡辺】
　はい。先程の長谷部さんからの質問にちょっと答えてなかったなと思いまして、まず生活支援相談員のアウトラインというところでは、閉じこもり防止、まあ、要するに孤立化防止・孤立死防止、ですね。
　それでこれまでの率で言いますと、やはり男性が多いんですね。そうしますと、どうして男性が出てきたくないか、どうしても人と接したくないのかという、そういう中で逆にですね、遊びであれ、働くことであれ、甘南備さんから出たような事業であれ、そこに喜び、自分になにか得られるものがボランティアさんと一緒に見つけていければ生活支援に結びついていくのかなと思います。
　それから地元に期待する事というところになると、なかなかこれは難しいのかなと。そうなれば借り上げにいる人が、特に会津各地いろんなお祭りなどがありますよね。そうすると自分のところにはない

お祭りもありますので、そういったものの仕組みとか、先ほどの甘南備さんのところをまた借りちゃうと、地域の行政で一所懸命やって、地域によっては自治会長さんが一所懸命呼びかけてくれてるところもあって、それを、さっき言ったスパンでいえばどれだけの期間世話になるのかという部分、自分なりに考えてもらって、そこに溶け込むという意味でのつなぎも必要になってくるのかなと思っております。そして何か得るものを、というのを模索していって、そのバックボーンとしてボランティアのみなさんのお考えなども取り入れていきたいなと思っております。

【長谷部】

ありがとうございます。では今野さんお願いいたします。

【今野】

はい。実は津波被害の大きかった三地区は建物を建ててはだめですよ、という禁止区域になりまして、その方々は必ず代替の場所を選んで土地を買って、家を建てなくちゃならないという状況になるんです。そういった方を自分の地域で受け入れていただく、今、仮設を回ってそういう方から困りごとで出てくるのは、私たちが新たに家を買った土地で、仲間に入れてもらえるんだろうかと、心配でなかなか前に進めないです、という話も聞くんです。

ですから、相馬市民としては地域力を高めていかなくてはいけない。ボランティアも含めて大きな気持ちで受け止めるという地域力を高めるのが大事なのかなと。それで、一人が一人を支えるという状態から、ネットになって行かなくてはいけない。そうなるとボランティアとして協力していただける方、というよりは、近所のお隣さんとして、震災のことも考えつつ一緒に進んでいく、ということが相馬の場合大事になるんではないかと思います。ということで、今後地域の人に期待することということでいうと、長谷部さんはボランティアの役割は？ということになりますが、一人一人がボランティアだという意識をしなくてもみんなで支えあって震災前よりいい相馬市に戻れることが大事だなと思っています。

【長谷部】

はい、ありがとうございます。あのね、みなさん、ドラえもんのジャイアンてご存知でしょ？このジャイアンの「お前のものはオレのもの、オレのものはオレのもの」という、非常にこの、唯我独尊という感じの有名な言葉がありますが、これね、のび太君がランドセルを歩道橋から落としてしまって、それがトラックの荷台に落ちて、トラックがどこかに行ってしまうということがあってね、それを必死に探して、見つけて、のび太君に返してくれたときのジャイアンのセリフなんです。「お前が困っている事はオレの事でもあるんだ」ということを、照れ隠しも含めて言った言葉が「お前のものはオレのもの」なんです。

きっと、新しく福島のいろんな町に引っ越してきた方がさびしい思いをしていたり、近所の事よくわからなくて不安だなと思う気持ちがあったり。これは受け入れた側も「どんな人が引っ越してきたんやろ」という不安な気持ちであったり、お互いに持っているんです。双方の痛みや、もしかしたら喜びとか、新しい人が引っ越してきてくれたんだという喜びもですよね。だってそうでしょ、自治会とかってなかなか活動の担い手が少なくなってきて、人手が足りないという時に、新しい人が引っ越してきたんですよ。

こうした喜びの部分も含めて”わたくしのこと”にして、自分たちの新しい仲間と、新しい生活をはじめていくということが、今これから何十年の事としてあるんです。少なくとも神戸では１６年それを

続けていますから、ここでもきっとそういうことが必要になるのは間違いないんです。どうぞ、地域の方々と、皆さんの様々な活動をうまく結んでいただいて、「支援する相手」ではなく「一緒に歩む仲間」としてとらえていただき、時に助け、時に助けられる関係でいって頂けたらなと思っております。

４人のみなさん、拙い進行でしたけども、非常に有意義な話をいくつも出していただいてどうもありがとうございました。私自身非常に勉強になった２時間でありました。（会場に向け）みなさんいかがでしたか？（大きな拍手）

今日のこの時間が皆さんの今後の活動にすごく役に立てばいいなと思っております。お時間が来ましたので結ばさせていただきます。長時間でしたが、最後までお付き合いいただきましてどうもありがとうございました。